

2021年11月14日 礼拝説教要旨

詩編講解説教85「正義と平和」

詩編85：9～14、マタイ12：15～21

第85編は、アドヴェント（待降節）に読まれる詩編として伝統的に教会で用いられてきたものと言われております。教会では、今月の終わりからアドヴェント（待降節）が始まり、クリスマスに向けての備えが始まります。わたしたちは今年のクリスマスをどういう状況の中で迎えることになるのでしょうか。特にコロナ禍で二回目のクリスマスとなります。感染が下火であるとは言え、すぐに元通りの生活という訳にはいかないでしょう。先週の長老会でもクリスマスのことが議題になりましたが、愛餐会は今年も中止になりました。また病の中で、不安を抱えながら過ごされている人たちがおります。世の中の情勢もまだまだ明るいとは言えません。なお暗いトンネルの中を出口の光を求めて必死に歩き続けているような状況ではないでしょうか。何より罪の闇がこの世を覆い尽くしているように感じます。でもこれがこの世を生きる現実です。救い主は到来したけれども、救いは未だ完了していない。それは救いの完成、終末を待たねばならないからです。それまではなお困難が続く。この世を生きることはそういうことなのです。

実は、この詩編第85編は、そうしたわたしたちの現実と重なるところがあります。救いの完成を待ち望みつつなお困難を耐える。そういう詩人の心境を読み取ることができます。「主よ、あなたは御自分の地をお望みになり、ヤコブの捕われ人を連れ帰ってくださいました」（2節）人々は捕囚を解かれ帰ってきた。しかし、それで神さまの救いはまだ完了したとは言えません。帰ってきたイスラエルの人々が直面した現実、まさに国が崩壊しているという現実でした。神殿も街の城壁も破壊され、家は焼かれ、井戸も埋められ、もはや生活する場所がない。街を再建していかなければなりません。しかしこれも容易ではないのです。以前も触れましたが、街の再建を周辺の国々が妨害しました。支配者はバビロニアからペルシャに移っただけで、その圧力は絶えずイスラエルの人々を脅かしていました。そういう苦しみをこの詩は表現しています。「あなたはとこしえにわたしたちを怒り、その怒りを代々に及ぼされるのですか」（6節）捕囚から解かれても、まだ苦しみが続くのですか。そういう悲痛な叫びがここにあります。

「わたしは神が宣言なさるのを聞きます」（9節）詩人はそういう厳しい現実の中で神さまの言葉を聞きます。そこから詩人の心境に変化が起こります。非常に後ろ向きだった言葉が、将来を期待する前向きな言葉に変わる。神さまの言葉を聞くということはそういう変化をわたしたちにもたらします。それまではただこの世の現実だけを見ている。それならば嘆くしかありません。けれども神さまの言葉を聞くことによって、わたしたちは目を上に上げることができる。そこでは救いの完成を望み見るのです。

パウロは言います。「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれぬようにしなさい」（コロサイ3：2）神さまの言葉を聞くことによって、わたしたちは「上にあるもの」この世の現実を超えて神さまの御業を期待するように導かれます。それは今日も変わることはありません。毎週の礼拝において、なぜわたしたちは神さまの言葉に聞き続けるのか。ここで救いの完成を望み見るからです。キリストの到来によってすでに救いは始まっている。そうであれば、もうやがて救いは完成する。「主を畏れる人に救いは近く、栄光はわたしたちの地にとどまるでしょ

う」(10節) わたしたちはこの礼拝において救いが近いということを実感するのです。

「栄光はわたしたちの地にとどまる」(10節) とあります。神さまの栄光が地上に届き、とどまることを知るようになる。神さまの栄光とは具体的に何でしょうか。「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし」(11節) とあります。ここに「慈しみ」「まこと」「正義」「平和」と四つの言葉があります。これらはもともと天来のもので、わたしたちの中にはありません。けれどもこれらが神さまの栄光として地上にもたらされる。それゆえにわたしたちは救いが近いことを感じるのです。

注目していただきたいのは、この四つは分離せず融合しています。それは神さまからのものだからです。人間からのものであればそれはお互いに分離し、対立するかもしれません。「正義と平和は口付けし」とあります。人間的な正義と平和は対立するでしょう。ある国の大統領は「正義のための戦争だ」と言ってアフガニスタンで戦争を始めた。そのように正義のために戦争をすることだってあるのです。「慈しみとまこと」も時に相反するのです。誰かを慈しむ、憐れむところに真実があるか。時にそれは偽善となり、見返りを求めるようになる。それがわたしたち人間の限界です。けれども神さまから来る栄光としての慈しみ、まこと、正義、平和は対立しない。一つになる。それはすべてキリストにおいて現れました。天からもたらされ、地上にとどまる栄光とはイエス・キリストのことです。

「まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」(12節) 天と地が互いに接近しています。その接点こそイエス・キリストに他なりません。クリスマスの出来事こそまさに今日の御言葉の成就です。「正義は天から注がれます」(12節) ある翻訳では「義は天から身をかがめる」となっています。神さまが身をかがめるようにしてこの地上に栄光をもたらしてくださいました。それがイエス・キリストの誕生、クリスマスの出来事です。そしてこの地上に神さまの栄光がとどまることを身をもってあらわしているのがキリストの体なる教会です。神さまの「慈しみ」「まこと」「正義」「平和」は地上の教会を通して世界に現されます。だからこそ、なお救いの完成を待たなければならないこの世においても、わたしたちは「上にあるものを求めて」希望を失うことなく歩み続けることができるのです。その恵みを感謝しつつ今年のクリスマスに備えましょう。